



新規来日JET参加者への アドバイス

～7月・8月オリエンテーションより

(財)自治体国際化協会業務部

新規JETプログラム参加者が来日 (7月下旬、8月上旬)

去る7月25日、8月1日に、新規JETプログラム参加者約1,500名が来日し、翌日から3日間の来日直後オリエンテーションが行われました。新規来日したJET参加者は、外国語指導助手(Assistant Language Teacher: ALT)と国際交流員(Coordinator of International Relations: CIR)の2つの職種です。ALTは、公立学校などで外国語の指導に、CIRは地方自治体で国際交流事業に従事します。

来日直後オリエンテーションでは、当協会による職種別のパネルディスカッションや日本の生活に関するワークショップ、文部科学省によるALT向けプレゼンテーションや学校別(小・中・高)ワークショップ、現役JET参加者の会(Association of JET: AJET)による授業や日本での生活に関するワークショップ、元JET参加者によるカルチャーショックへの対応法に関する講演等が行われました。

本稿では、当協会が主催した職種別(ALT・CIR)パネルディスカッションから、現役JET参加者、日本人担当者からの意見や職務にあたってのアドバイス等を紹介します。

ALTパネルディスカッション

日本人英語教師、現役ALT 2名及びクレアスタッフにより、来日後の生活、授業における心構え、日本人英語教師とのコミュニケーション等につ

いて意見が交わされました。

日本人英語教師からは、間近に控える日本の英語教育における大きな2つの変化について説明がされました。これは、2011年度からの公立小学校英語活動(5、6年生を対象とし年間35時間)の必修化および2013年度からの高校の英語の授業が基本的には英語のみで行われるようになることです。このような流れの中で、ALTは生徒の英語でのコミュニケーション能力の向上に貢献することが期待されています。

現役ALTからのアドバイス ——赴任に向けて準備したこと

現役ALTからは、新規参加者は夏休み期間に各学校に赴任することになるため、夏休み期間中に日本語で自己紹介ができるよう準備をするようにとのアドバイスがありました。

これは、簡単な日本語であっても、日本語が話せるということで、JET参加者と職員や生徒との距離を縮めることができるという体験談に基づくものです。

名前、出身国、趣味や日本で経験したいことなどを盛り込んだ簡単な原稿を作って、あらかじめ練習するのも一法と勧めていました。

別のパネリストは、短時間で日本語能力を向上させようと背伸びするのではなく、まずは初歩的な会話から始めて、徐々に日本人とのコミュニケーションが取れるよう、日本語を勉強していけばよいのではないか、という意見も出ました。



CIRパネルディスカッション



小学校ALT対象のワークショップ



ALT向けワークショップ

職場での人間関係を築くために

職場における良好な人間関係の構築は、日本人教師、ALTだけでなく生徒たちにとっても重要であることから、まずは、ALT担当の日本人英語教師についてよく知ることが先決とのアドバイスがありました。また、英語科以外の先生方や、学校の事務職員の方々ともコミュニケーションが取れるようになれば、さらにALTとしての活動が楽しくなるとの意見も出ました。

また、たとえ日本語が話せない場合でも、職場に来たら「おはようございます」、帰るときは「失礼します」という挨拶だけでも日本語ですが、人間関係の円滑化に寄与するというアドバイスもありました。

さらに、公式・非公式を問わず飲み会に参加すること、一緒に昼食を食べに行ったり、旅行に行ったときはお菓子などの「お土産」を買ってきて回すことも紹介されました。

日本語能力について

ALTはCIRのように高度な日本語が求められているわけではありませんが、日常生活だけでなく日本人教師との打ち合わせの際も、日本語が話せた方が、職場における交流の幅が広がり、人間関係も深めることができます。

日本語能力の向上については、現役ALTから、自身の体験に基づいた学習方法の紹介がありました。具体的には、日本語学習の本を利用したり、日本人による個人レッスンを受れたり、インターネットとスカイプを利用して日本人と会話した、などです。また、興味のあるテレビ番組を見ながら楽しんで勉強したり、難しい単語の少ない子ども向けの文章やホームページで語彙を増やしたりするという取り組みも紹介されました。

CIRパネルディスカッション

CIRの行う通常業務について当協会PC、現役のCIRからの説明の後、現役のCIR、都道府県のJET担当者によるパネルディスカッションを行いました。

職場で役に立つ知識やビジネスマナー

現役のCIRから、職場での心構えや、日本でのコミュニケーションの方法に適應することについて具体的に意見が述べられました。

あるパネリストは、チームワークの重要性を訴えていました。国際交流業務は、1人でできるものではなく、職場の同僚や地域の人々と協力して取り組む必要があること、「これはCIRの仕事ではない」と不満を言うCIRもありますが、チームの一員であることを認識して何事にも積極的に取り組んでほしい、と補足していました。

また、文化の違いに起因するでしょうが、外国人は自分の言いたいことをはっきり言う傾向があるのに対し、日本人はその場の雰囲気に合わせて柔らかく自分の意見を主張するため、こうした話し方に慣れる方がいいという助言もありました。

さらに、職場で使われる敬語や電話固有の表現は会得する方がいいということ、方言についてはテキスト等で学べるものではないので、地元の人に聞きながら少しずつ覚えて、会話の意味が分かるレベルになれば望ましい、という意見も出ました。

地元との交流について

地域にいるJET以外の外国人との交流については、いろいろな国から来ている留学生のサポートをしたり、国際交流イベントに参加したりしているようです。

また、職場以外でも、なるべく多くの日本人とのふれあいの機会を作ることも重要です。

地域の日本人との交流については、スポーツサークルに参加したり、地域のイベントに参加したりして交流する機会を持つことが紹介されました。

ただ、地元との交流については地域により差があるため、場合によっては自らそうした機会を求める積極性が必要であるとの意見もありました。

CIRに期待すること、CIRならではの視点が役に立ったこと

日本人JET担当者からは、日本人が持っていない外国人としての視点を生かしながら、日本での職場の習慣に適應してほしいとの意見がありました。例えば、仕事の期限を守ること、担当者から上司に伺いを立てることなど、日本の慣習を守ることです。また、CIRは通訳・翻訳を担当することが多いですが、特に日本語への翻訳においては高度な能力が求められるので、それに対応できるようにしてほしいという要望がありました。

CIRならではの活躍事例としては、北米ビジネス交流促進事業で見本市に出展する企業を探す際に米国出身のCIRによって米国のニーズにあった業種を選べたこと、学校や住民向けの講演会で外国の生の情報を紹介できることが挙げられました。また、ウェブサイト構築など、特技がある人は遠慮せずにどんどんアピールして職務に生かしてほしいという意見も出ました。

おわりに

現役のJET参加者と話す機会がありますが、日本人と交流する機会を積極的に作ったり、標準語だけでなく方言も少しずつ覚えたりしている参加者も多い（なかには、完璧な関西弁を操る人もいます）ことなどから、JET参加者は、職場や日本の環境に順應するために非常に努力していることが伺えます。

2日間のオリエンテーションで学んだことはあくまで基礎的な部分であり、新規参加者は職務を遂行する上でも、日常生活を送る上でも、これから乗り越えなければならない困難な場面があるかもしれません。新規JET参加者が先輩のJET参加者や日本人担当者の意見なども聞きながら各職場で立派に活躍することを願うとともに、自治体や学校関係者などの周囲の方々におかれても、JET参加者との交流を積極的に図っていただければ幸いです。



私のALT物語： 学んだことは贈り物

山形県教育センター外国語指導助手

Chiara Davis Fuller

キアラ・デービス・フューラー

JETプログラムは、さまざまな人を驚嘆させ、挑戦させ、やりがいを持たせてきました。2006年8月に日本に来たとき、私はこのJETプログラムによって自分の生活がどうなるのか想像できませんでしたが、教室内外でさまざまな挑戦をしていきたいと思っていました。私の目標は、一生懸命に働き、日本の文化をなるべく多く学びながら新しい経験を受け入れていくことでした。日本に来る前には、以前ALTだった人の話を聞いたり読んだりしていたのですが、今度は私が自分の「ALT物語」を作っていこうと思いました。私の「ALT物語」は今のところこのような感じです。

私は、JETプログラムの中でも少し変わった経験をしています。最初に山形県に来たとき、私はALTとして米沢市にある県立米沢商業高校と県立米沢興譲館高校に勤務し、全部で3年間、米沢で過ごしました。

米沢は大好きでしたし、そこでの生活も友人も仕事も大好きでした。毎日が充実していました。米沢商業高校では、「国際理解」の授業から「オール・コミュニケーション」の授業までさまざまな授業をし、米沢興譲館高校では、リーディングやライティングの授業でチーム・ティーチングをしたり、大学入試対応のエッセイ・ライティングの授業をしたりしました。どちらの学校でも、英語クラブの活動を任せられ、月曜日から金曜日まで毎日どちらかの学校で活動していました。それでも、私はもっと多くのことをしたいと思っていました。STEP英検の二次面接練習や、地区や県

の英語弁論大会のための個別指導もしました。また、クラスマッチで審判をしたり、吹奏楽の定期演奏会で歌ったり、文化祭では合唱コンクールやクラス装飾の審査員をしたりもしました。

ボンボンこそ使いませんでしたが、最高の「チア・ガール」になろうと思っていました。私はスポーツが大好きで、地区の高校総合体育大会などでは、できるだけ多くの競技を見に行きました。時には、「Go! Fight! Win!」と英語で叫んでいる私を不思議そうな目で見ていた保護者もいましたが、休憩時間には飲み物をもらったりもしました。私が高校生のときにやっていた応援を聞いて、生徒は喜んでいるようでした。教室の内外、特に教室の外で生徒に関わることは時間をとられるものですが、私はそのような機会を大切にしていました。

すばらしい生徒たちばかりで、そのエネルギー、



キアラ&米沢商業高等学校生徒 in 山形県英語スピーチコンテスト



キアラティーチング3年生ライティングクラス in 米沢興譲館高等学校

勤勉さ、関心の高さ、好奇心に、いつも楽しませてもらいました。教えるときは、「生徒のために」教えることを心がけました。授業では、多くの文化的・教育的なやりとりをし、お互いの共通点や相違点を共有しました。一緒になって、言葉や身振りを通してさまざまな形のコミュニケーションができる関係を築きました。生徒たちは、自分を表現しようと一生懸命でしたし、また、私のことを理解し受け入れようとしてくれました。それはとても嬉しいことでした。

2009年8月、県庁所在地の山形市に移り、JETプログラムのALTとしては今までと違った立場となり、県教育センターで働くことになりました。仕事は大きく変わりましたし、訪問する学校も全く変わりました。県立山辺高校（看護科と食物科と福祉科があります）と県立山形盲学校（幼小部、中学部、高等部があります）で授業をしています。教育センター主催のさまざまな研修も担当しています。中学生や高校生ではなく、中学校や高校の日本人英語教師を対象に講義をし、ガードナーのmultiple intelligencesやティーム・ティーチングのやり方、授業の計画など、さまざまなことについて議論しました。

JETプログラムにより県内に滞在している英語話者64人のための県アドバイザー（Prefectural Advisors=PA）としてカウンセリング的立場も担うようになりました。PAとして、新しいALTのためのオリエンテーションや中間研修、地区研

修の準備や運営の手伝いをしています。情報を提供し、また、もしJETプログラム参加者に何か困ったことがあれば、私に相談するようになっていきます。米沢市での経験から、私はJETプログラムに参加している仲間の役に立ちたいと思っていますし、山形県におけるJETプログラムが素晴らしいものになるよう貢献したいと思っています。この新しい立場はそんなことができる機会を与えてくれました。

新しい仕事によって、また新しいことに気づきました。盲学校での素晴らしい経験に感謝しています。生徒たちのほとんどは目が見えないのですが、好奇心が旺盛で、いつもにこにこしていて、声を出して笑い、すぐに私に心を開いてくれました。盲学校での経験で、愛情や優しさや喜びといったものはいつも目に見えるわけではないことを学びました。毎日のありふれたことで人生をいかに本当に楽しむかということについてよくわかったような気がします。

JETプログラムでは貴重な体験をしてきました。与えることよりも受け取ることの方が多かったように思います。嬉しかったこと、学んだこと、分かち合ったことは、5年目、6年目、そしてその後も私の中に残るでしょう。今後のことはまだわかりませんが、この経験がどんな将来をもたらすか楽しみです。



アメリカ・マサチューセッツ州出身。マウント・ホリヨーク大学で国際関係を専攻、またケンブリッジ大学にて教育学の修士課程を取得。ピースコープを終え、日本文化をより深く学びたいという思いから2006年にJETプログラムで来日。山形県立米沢商業高校と米沢興譲館高校にて3年間ALTとして勤務。現在は山形県教育センターで県JETプログラムアドバイザーとしてALTの研修事業等に熱心に関わっている。将来はアメリカに戻り、国際教育学や国際関係学、また地域開発学をより深く学びたいと考えている。

Chiara Davis Fuller



出会い、交流、 学びあい

～JETプログラムでの思い出作り

三重県生活・文化部国際室国際交流員

Ana Akemi Furukawa

アンナ 明美 古川

JETプログラムのことを初めて知ったのは大学を卒業する数ヵ月前で、CIRの仕事にすぐ関心を持ちました。国際関係学部で勉強してきた私には、CIRの仕事がぴったり合うと思い、応募することを決めました。ブラジルで日本語を話せる日系人が減少している中、その言語を活かしながら両国の関係を深め、社会貢献をすることができる仕事を新卒でも応募できるとは、絶対見逃せないチャンスでした。しかし、面接は自分が思ったように上手くいかなく、もうブラジルでの就職を考えながら、結果発表をあまり期待せず待っていました。なので、サンパウロ総領事館から電話が来た時、変人と思われるほど道をピョンピョン跳ねながら嬉し泣きしました。

私は三重県庁の生活・文化部国際室で勤めることになり、三重県について地震と台風が多いということ以外にはあまり知らなかったもので、いろいろと先輩に聞いたり、自分で調べたりしていました。三重県内に忍者の里があることや養殖真珠に初めて成功した場所があることなど知って、三重県で働くことに誇りを持つようになりました。さらに、三重県とブラジルのサンパウロ州が姉妹提携を結んでいることを知り、大喜びしました。国際交流や交渉、政策計画などさまざまな仕事ができると思い、早く働き始めたくてうずうずしていました。

健康診断、お土産の買い物、先輩への長いメールや最後の準備などで、1ヵ月半はあっという間に過ぎました。気がついたら、成田空港から出た

バスに座っていて、窓から桜が散るのを眺めていました。今回で日本へ来るのが3回目ですが、仕事としては初めて。興奮、緊張、不安などの気持ちで頭と胸がいっぱいでした。そこで、1人の韓国のCIRと話すと、私が苦手な敬語を完璧に、日本人であると思えるぐらいの日本らしさを見せてくれ、もっと動揺しました。他の2人のブラジル人CIRも数年日本語教師としての経験があり、日本語のレベルももちろん私よりも高かったです。そして、最大の不安は、前任者があまりにも優秀な人で、私は職場の人の期待に応えられるか、パニックになりそうでした。

しかし、三重県に着くと、職場の皆さんの優しさや忍耐力のおかげで少しずつ仕事に慣れていき、不安も少しずつ消えていきました。最初は緊張でちょっと変な日本語も出て、何回聞いても意味が分からない言葉も少なくはありませんでしたが、日本語も徐々に上達して、後輩で何も知らなかった私は、1年半後、もっと落ち着きのある先輩(!)になれました(と思います)。

職場では4人の国際交流員以外にも外国と繋がりを持つ者が多く、相互理解の意識が高く、個性も認めてくれるので、とても働きやすい、外国人にフレンドリーな環境です。CIRとしての仕事は想像していたイメージと違って、かえってその方がよかったと思います。政治、貿易や協力協定など、もっと硬い内容の仕事をすると思っていましたが、翻訳や学校訪問、国際交流イベントの企画や多文化共生社会の実現に繋がる活動などを行う



文化交流会でブラジルの代表

ことになり、かえって毎日が楽しく過ごせて、時には楽しすぎて、本当に仕事をしているのか疑うことすらあります。

ブラジル人が割合的に多い三重県では、ブラジルCIRの役割もただの国際交流や国際化とは違います。もっとブラジルについて知りたいという学校からの依頼が多く、県内の学校を訪問する仕事がたくさんあると同時に、在住ブラジル人向けの情報提供サイトや生活に役立つ情報などを翻訳したり、ネイティブチェックを行ったり、ブラジルとのやりとりをしながら歴史の長いブラジル人と日本人の関係を深める、やりがいのある仕事が出て、とても嬉しいです。

ブラジル人でありながら日本政府の下で働き始めた頃には、自分のアイデンティティを考えさせられました。ブラジルではちょっと日本人っぽかった私でしたが、日本に来ると、日本らしさが欠けたブラジル人であることに気づきました。私はブラジル人でもなく、日本人でもない、世界に居場所がない人？ それとも、ブラジル人でありながら、日本人でもあり、世界中が私の家？ 私は後者の選択肢を選びました。

CIRの仕事を始めて、交流の重要性和素晴らしさを見せてもらいました。生活している社会の中で当たり前だと思われることを、第三者として視点を変えながら見るようになり、ブラジルに対しての意見、長所と短所もじっくり考えるようになりました。人はもし他の文化に触れ合う機会がなかったら、自国の文化についてもっとじっくり調べたり、人へ紹介したりすることはないと思います（社会学者や人類学者等を除く）。国と国がお



職場の人との遠足で

互い学び合うことは山ほどあり、交流の場がなければ自国や他国に対する意識が低くなる、またはなくなる恐れがあると思います。異文化の良さ、「違いがあるからこそいい」という文の意味深さをやっと理解したような感じがしました。

もちろん、CIRの生活は仕事ばかりではありません。落ち着いたある先輩になったといいながら、自由時間には落ち着きのない私であります。合気道、日本語の勉強、ボランティア活動、通信教育の大学院、カメラ中毒、旅行、富士山登山などいろんなことに挑戦し始めて、今はのんびりする時間すらないくらいです。じっとしてられない私は、限られた時間にもっとも多くのことを経験しながら、かけがえのない思い出づくりに頑張っています。

JETプログラムならではの毎日を精いっぱい楽しみながら、将来、CIRやALTとして選ばれ来日する人も日本の美しさや三重の温かさをぜひ実感してほしいです。



1987年生まれ、ブラジル・ロンドニア州出身の日系2世半。1993年に家族と共に1年半埼玉県で暮らし、2002年、JICAの研修のため、神奈川県に1ヵ月住む。母国では国際関係学部を卒業し、CIRとしての経験が最初の仕事。趣味は外国語の勉強、読書、スポーツと旅行。将来の夢は、国際機関やNGOなどで教育関係など社会貢献を与える仕事をしたい。

Ana Akemi Furukawa

My JET Story: The Gift of Learning

The JET Programme has been amazing, challenging and rewarding on so many levels. When I arrived in Japan in August of 2006, I didn't know what kind of role the JET Programme would play in my life. However, I did know that I wanted to challenge myself inside as well as outside of the classroom. My goals were to work hard and welcome new experiences while learning as much as I could about Japanese culture. I had read about and heard about various former JET stories, and I was eager to begin my own. Here is my JET story.

I have had a unique opportunity in the JET Programme. When I first moved to Yamagata prefecture, I worked as an assistant language teacher for Yonezawa Shogyo Senior High School and Yonezawa Kojikan Senior High School. I lived and worked in Yonezawa City for three years.

I fell in love in Yonezawa city. I loved my life, my friends, and my job. I began each day with a smile because my heart was content. Yonezawa Shogyo Senior High School gave me the opportunity to work in classes that focused on subjects from "International Understanding" to "Oral Communication". At Kojikan Senior High School, I team-taught in reading classes, writing classes and a university entrance exam essay writing class. I was given great flexibility with the English club activities at each school. I had English

club five days a week. Yet, I still wanted to do more. Throughout the school year, I took on additional responsibilities. I tutored students for their Eiken English proficiency tests as well as their regional and national English speech contests. I officiated class-match day games, sang in a brass band concert and judged the chorus and classroom decoration events on Culture Day.

I tried to be the best cheer girl ALT ever! I love sports and I went to high school competitions as much as I could. Sometimes parents looked as if my "Go! Fight! Win!" cheering attitude was strange, but they always gave me coffee and tea during breaks. The students seemed happy when they heard me shout my old high school cheers during their games. Work inside and outside of the classrooms was busy, but I truly cherished each day.

The students have been wonderful. Their energy, hard work, respect and curiosity have brought me great happiness. When I teach, I teach for them. The classroom has been a place where numerous cultural and educational exchange moments have happened. We have embraced and shared our differences as well as our similarities. Together, we have built relationships that are open to various forms of communication whether it be through words or hand gestures. They have always been themselves while striving to learn more. In turn,

Encontros, intercambios e aprendizados mutuos

Soube do JET Programme há alguns meses antes de concluir a minha graduação, e logo me interessei pela posição de CIR. Para mim, estudante de Relações Internacionais, o cargo de Coordenadora de Relações Internacionais ajustava-se perfeitamente às minhas expectativas de trabalho, e não tive dúvidas na hora de me inscrever. Com a gradativa diminuição de descendentes de japoneses falantes da língua, ter a oportunidade de usá-la no trabalho para aprofundar as relações entre o Brasil e o Japão e poder contribuir com a sociedade, mesmo sendo uma recém-graduada, era uma chance imperdível. Entretanto, a entrevista não correu de forma satisfatória (ao menos para mim) e eu já estava pensando em começar a busca por empregos no Brasil mesmo, enquanto aguardava pelo resultado da seleção, sem muitas esperanças. Por isso, ao receber a ligação do Consulado-Geral de São Paulo, chorei de alegria enquanto saltitava pelas ruas de São Paulo de tal forma que devo ter sido considerada pelos transeuntes de louca ou estranha.

Fui designada para trabalhar no Escritório de Assuntos Internacionais, no Departamento de Assuntos Sociais e Culturais do Governo de Mie e, por não saber muito da província – além do conhecimento básico de que a mesma situava-se em região propícia a terremotos e furacões –, comecei a perguntar à minha senpai e a pesquisar por conta própria. Quando soube que Mie abrigava o berço dos ninjas e que foi o primeiro lugar do mundo a ter sucesso no cultivo de pérolas artificiais, senti um certo orgulho de trabalhar na província. Ademais, fiquei muito feliz quando soube que a província de Mie e o Estado de São Paulo tinham um Tratado de Amizade e Cooperação: a possibilidade de trabalhar com intercâmbios e negociações internacionais, planejamento de políticas, etc me deixou ansiosa e impaciente para que o meu trabalho começasse logo.

Exames de saúde, compras de presentes, e-mails extensos à minha

senpai para tirar as dúvidas e os últimos preparativos para a viagem fizeram o período de um mês e meio passar voando. Quando percebi, já estava sentada no ônibus que partia do Aeroporto de Narita vendo as pétalas das flores de cerejeira caírem lentamente. Esta é a minha terceira vez no Japão, mas a primeira a trabalhar. Minha mente e coração estavam cheios de excitação, nervosismo e preocupações e o sentimento de inquietude só piorou ao trocar algumas palavras com uma CIR coreana, que dominava o keigo (modo de se expressar de forma respeitosa – que ainda hoje eu tenho uma certa dificuldade) de maneira perfeita e tinha uma postura impossível de se distinguir de uma japonesa comum. Os outros dois CIRs brasileiros que vieram comigo também acumulavam anos de experiência como professores de língua japonesa e, obviamente, tinham um nível de japonês superior ao meu. E a minha maior preocupação: a minha predecessora era simplesmente uma pessoa super qualificada e eu estava à beira do pânico com a preocupação de conseguir atender às expectativas da minha organização contratante.

Chegando em Mie, porém, a bondade e a paciência das pessoas do meu local de trabalho ajudaram na minha adaptação gradativa com as funções que eu deveria desempenhar; as preocupações também foram desaparecendo pouco a pouco. No início, lembro-me que eu soltava um japonês "meio estranho" por puro nervosismo e que não eram poucas as palavras que eu não conseguia compreender, mesmo pedindo para ouvir várias vezes. Felizmente, minhas habilidades linguísticas melhoraram e passei de uma *kōhai* (caloura) insegura a uma *senpai* (veterana) mais madura e tranquila.

Meu ambiente de trabalho é bem internacional e receptivo a estrangeiros: além dos 4 CIRs, muitos têm algum tipo de ligação com o exterior e é perceptível a consciência de compreensão mútua e o respeito à individualidade de cada um. O trabalho de CIR mostrou-se

Chiara Davis Fuller

they have allowed me to be myself and enter into their world. This acceptance has made my heart smile on many occasions.

In August of 2009, my world that I once knew in Yonezawa city changed. I moved to Yamagata, the capital city in my prefecture and worked as a new kind of JET ALT. I began to work for the Yamagata Prefectural Education Institute. My responsibilities changed. The new schools that I taught at were completely different. I began to teach at Yamanobe Senior High School (nursing, cooking and welfare school) and a school for the blind that incorporated elementary, junior high and senior high school curriculums in the same building. I also had various teaching seminars to lead at the Institute. I was instructing Japanese English teachers instead of high school. It was new, but I enjoyed it. We discussed various topics from Gardner's Multiple Intelligences to Team-Teaching strategies and lesson planning.

I took on a counselling role and became one of the four Prefectural Advisors (PAs) for 64 JETs in my region. As a PA, I helped coordinate and run new JET orientation, mid-year seminar and regional seminars. I was a source of information and if a JET had a problem, they could come to me for help. After working in Yonezawa city, I knew I wanted to support my fellow JETs while using my experiences to help the JET Programme excel in Yamagata. This new position gave me that chance.

Each change opened a new door of awareness. Some of my most memorable experiences happened when I visited the school for the blind and visually impaired. Working with the students from the blind school was nothing short of a blessing. Even though the majority of them could not see, they enjoyed exploring many familiar and unfamiliar things in their environment. They always smiled, laughed loudly and they welcomed me into their school family. The students and teachers opened up to me and I showed them the same. On those visits, I learned that love, kindness and joy aren't always seen. In this case, my experiences and connections with the students were intangible. I gained a deeper understanding of how to truly enjoy each day of life.

My JET experience has been an amazing journey. JET has allowed me to give of myself, but I have received so much more. The gifts of joy, learning, teaching and sharing will remain with me for my fifth and final year and beyond. I am looking forward to experiencing what I cannot yet see.

英語

- construindo lembranças do JET Programme.

Ana Akemi Furukawa

bem diferente das minhas expectativas, mas isso não foi de todo ruim: eu esperava que meu trabalho envolvesse um conteúdo mais “duro”, como política, comércio e acordos de cooperação, mas o que me aguardava eram visitas a escolas, traduções, planejamento de eventos de intercâmbio internacional e atividades relacionadas à promoção de uma sociedade de convivência multicultural. Isso não me desanimou; pelo contrário, meus dias de trabalho têm sido divertidos e por vezes chego a pensar se o que estou fazendo é realmente considerado “trabalho”.

O trabalho de um CIR brasileiro em uma província onde tal nacionalidade é a mais numerosa entre os estrangeiros, como é o caso de Mie, difere de simples atividades de intercâmbio internacional ou de internacionalização local. Ao mesmo tempo em que são numerosas as solicitações de escolas japonesas para receber um CIR brasileiro e aprender um pouco mais sobre a cultura do Brasil, outras responsabilidades envolvem a seleção e a tradução de informações úteis à população brasileira local, a manutenção de *websites* de provimento de informação em língua estrangeira, a verificação de traduções realizadas em órgãos oficiais da província e também mediações de comunicações com o Brasil. Posso afirmar que me sinto realizada e feliz por poder realizar um trabalho que acredito ser útil para construir um bom relacionamento entre brasileiros e japoneses, que já possuem uma longa história em comum.

Ser brasileira e trabalhar sob a jurisdição do governo japonês também me fizeram repensar a minha identidade. Se no Brasil eu me considerava um pouco japonesa, ao vir para o Japão, percebi que me falta um pouco de “niponicidade”. Não sou brasileira, nem japonesa e não tenho lugar no mundo? Ou sou brasileira e japonesa e o mundo é a minha casa? Fico com a última opção.

Ao iniciar o meu trabalho como CIR, comecei a perceber a

necessidade e a beleza do intercâmbio. Passei a ver as qualidades e os defeitos do Brasil com outros olhos, mais atentos: olhos de uma observadora em terceira pessoa que vê através e mais além do que se torna óbvio no cotidiano de uma sociedade. Se não tivéssemos a oportunidade de interagir com outras culturas, teríamos o interesse de investigar mais a fundo a nossa própria cultura e apresentá-la a alguém? Com a exceção de sociólogos e antropólogos, eu diria que não. Diferentes países têm muito a aprender uns com os outros e eu acredito que a inexistência de um espaço de intercâmbio limitaria muito a nossa consciência sobre os outros e sobre nós mesmos. Sinto que enfim compreendi o profundo significado da expressão “*chigai ga aru kara koso ii*” (algo do tipo “a beleza está na diferença”).

Obviamente, a vida de um CIR não se resume apenas ao trabalho. Ao mesmo tempo em que disse mais acima ter me tornado uma *senpai* mais tranquila, sou uma pessoa que não consegue ficar parada quando tenho tempo livre. Aikidô, estudos de japonês, atividade voluntária, pós-graduação a distância, um novo hobby pela fotografia, viagens, escalada ao monte Fuji... São várias as coisas que comecei a experimentar para ocupar o tempo livre e posso dizer que hoje em dia quase não tenho tempo livre. Mas posso também afirmar que todo o esforço dispendido neste tempo limitado vale a pena e me ajuda a construir lembranças inesquecíveis. Enquanto me divirto neste dia-a-dia que acredito ser possível somente por ser parte do JET Programme, espero que aqueles que tenham a sorte de algum dia virem ao Japão como CIRs ou ALTs também possam desfrutar da beleza do Japão e do calor das pessoas de Mie, como eu estou vivenciando agora.

ポルトガル語